
スミレの花の砂糖づけ

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スミレの花の砂糖づけ

【Nコード】

N1409Y

【作者名】

麦子

【あらすじ】

ある日突然、名前も知らない男の子の彼女にさせられてしまった引つ込み思案な女の子。その女の子を振り回して困らせるのは面倒くさがり屋で俺様系な男の子。
そんな2人のデコボコな恋のお話。

1・花と牙

花のにおいがした。

立ち止まって、辺りをぐるりと見渡すが花なんてどこにも咲いていなかった。すぐにその花のようなにおいは消えて、隣の女から香ってくる香水のにおいしかなくなる。あー、うざってえ。勝手に寄ってくる化粧で素顔を隠す女共も、絡み付いてくる腕の体温も、夏のうだるようなこの暑さも、太陽も青空も、ぜんぶ消えちまえばいい。次の講義は、なんだったか。考えるのも面倒だったので、サボることに決めた。

甘える仕草をして見上げてくる…えーと…チエミっぽい名前の女から視線を外す。このタイプの女にも、そろそろ飽きてきたな。

「早乙女くん、次の講義行かないでこのまま遊びに行かない？」

「行かねえ。っーかチエミ、離れろっぜえ」

「あたしミエコだけど…チエミって誰？」

「知らね」

チエミじゃねえのか、かなりどうでもいい。キンキンと何か叫びはじめた声は聞こえないふりをしてあくびをひとつ、ふたつ、みつつ、さりげなく鼻をつまんで、女から二歩ほど遠ざかる。このにおい、だめだ。酔った。

「ねえ、早乙女くん聞ってるの！」

「お前、うざい。さつきから何？俺の何なの？」

「かつ彼女でしょ！」

「は？」

「だ、だって昨日…」

あかさらまにモジモジして、顔を赤くさせる。だめだ、萎えた。お決まりのセリフ、お決まりの表情、お決まりの態度。だから飽きたって言うてんだろ、俺は。もっとバリエーションをひろげる。そうしたら、あと一回だけなら彼女気取りさせてやってもいい。ベッドの中で囁いてやった甘い言葉だけで、俺のすべてを好きになった気である女ならこいつじゃなくてもいい。探せば腐るほどいる。いらねえけど。

「あんたのことは、もう抱かねえよ？金輪際、一生、ぜったいに。俺のタイプじゃねえんだよ」

「じゃ、じゃあ…早乙女くんのタイプの子ってどんな女の子なの？」

「タイプも何も…俺、今付き合ってるやついるんだけど」

嘘だけど。付き合ってる女どころか好きな女さえもないけど。もういいんだよ、面倒くせえ。俺は早くこの暑さと香水のにおいと生あたたかい体温から解放されたい。

「…誰？さつき言ってたチエミっていつ子？」

うんざりする。チエミって誰だと舌打ちをしつつ、適当に周りを観

察する。

木漏れ日の下、夏だというのに真っ白な長袖の丸襟ワンピースを着た女がベンチにちょこんと座りこんでいるのが見えた。面倒くせえ、もうあのワンピース女でいいか。

ズカズカと、その女の前まで早歩きでたどり着く。女は俺の存在に気付いていないらしく、長い栗色の髪で顔を隠したままずっとうつつむいている。そんなことお構い無しに、俺は女の手首を掴みあげた。予想以上に細っこい腕をしっかりと握り、さっきから彼女気取りでいやがる面倒くせえ女に向かって一言。

「こいつが俺のタイプの女で、俺の彼女だ。」

数秒の沈黙のあと、泣き出しそうな顔で俺を睨んだ彼女気取りは「ありえない！」と捨て台詞を残して走り去っていった。あー、しんどかった。

「……」

「あん？」

掴んだままだった腕がわずかに抵抗を見せた。ここでようやく、ワンピース女と目を合わせた。長い前髪で半分以上隠れてしまっている眼は、更にでかいフレームの眼鏡で隠れてしまっている。眼鏡女は、小刻みに震えている唇を動かそうとして、きゅっと閉じてからまた下を向いた。やべえ、すごく面倒くせえ。この女。

「っーか、下ばっか向いてんじゃねえよ」
「っっ」

無理やり顎を掴んで、視線が合うようにする。栗色の髪がふわりと揺れた。鼻をかすめた一瞬の、春のような甘いにおい。怯えた瞳がみるみるうちに潤んでいくが、そんなことは今はどうでもいい。鼻先がくっつくぐらい近付いて、目を閉じる。ああ、やっぱりそうだ。

花のにおいがする。

2・噛まれた花

都会はおっかないです。女の子たちは尖った爪をカラフルな色に塗って、白い太ももを堂々と見せ付けるようにみじかいスカートをひらめかせていますし、男の子は日本人特有の黒い髪色を好き勝手に染色して道端で煙草を吸って地球の空気を困らせています。都会のひとが皆、そのようなひとばかりではないのですが、田舎育ちのわたしには少々いえ、かなり刺激が強すぎなのです。ひと音も空気においも、すべて。息苦しくて、たまらない。

「こいつが俺のタイプの女で、俺の彼女だ。」

大学内で唯一心安らげる場所で休憩している時、いきなり真上からぐんつと手首をひっ掴まれる感覚がしてくらりと眩暈がしました。夏のゆらゆら揺れる陽炎の中で、威圧感のある背中だけがわたしの目に映りこんできたのです。一瞬、なにが起こったのか分かりませんでした。わたしがぐるぐると考えこんでいる間に、女のひとの泣きそうな声とヒールの音が遠くなっていきます。…夏のマボロシでしょうか？

「…ったく、面倒くせえな」

低い、男のひとの声。わたしの腕をすっぽりと掴んでしまう大きくてごつごつした手のひら。急に、現実には引き戻されたかのよう。

こわくてこわくて早く逃げ出したいのにすっかり震え上がって動かなくなってしまった両足とへなちよこの心臓が情けなくて、泣きそうになりました。わたしの腕を掴んだままの男のひとが、何か話しかけてくるようでしたがこわくて顔が上げられません。息苦しくて吐きそうです。

「つーか、下ばっか向いてんじゃねえよ」

またもや、強引に顔を上げさせられてしまいました。そろりそろりと目を開けてみると、綺麗な顔立ちをした男のひとが至近距離でわたしを食い入るようにじいつと見つめているではありませんか。勝手に目が潤んでいきます。

「早乙女ー、何やってんだよー」

「ああ？」

“早乙女”と呼ばれたそのひとは、やっとわたしの顔から手を離して視線を外してくれました。ふらりとからだが傾いてその場にしゃがみこみます。眩しくて、焦げるかと思いました。やはりわたしには、夏は不向きなのです。

「お前また女の子腰砕けにさせるようなことしてたの？真っ昼間からやめろよなー」

「そんなことよりも、野上。てめえ、なんで電話でねえんだよ」

「だって、早乙女だったから」

「“だつて”の意味がわからねえつつの」
「ねえあんた、大丈夫？顔色悪いよ？」
「おい、無視してんじゃねえ」

うずくまっていると、控えめに肩をたたかれました。さっきの“早乙女”さんとはまた別の男のひとの声。顔をあげないままこくと頷くことしかできません。「こわかったねー」とやさしく頭をポンポンと撫でられます。…あれ、優しい？うつかり顔を上げそうになりましたが、先程の早乙女さんという方の鋭い眼差しと強くて強引な手の力を思い出してぎゅっと目をかたく閉じます。

「あーあ。早乙女ー、お前この子に何やったんだよー。すごい怯えようじゃんか」
「知らね。つーか、あんま触んな。そいつはもう俺が唾つけたんだ」
「あっそう。分かった」

よく分からない言葉たちが頭上で飛び交う中、わたしはどうやってこの場から逃げ出そうかということばかり考えていました。どうしてこんなことになったのでしょうか。今までこの場所にいて、わたしに気付くひとなんていなかったのに。

「つーわけだ」
「どういうわけ？」
「だから、こいつは今日から俺の女つてことになったんだよ」
「あれ？サトミちゃんとはどうなったの？」
「誰だサトミって」

「早乙女って、本当に最低だよなー。まあ、いいや俺には関係ないし」

「おら、いつまで下向いてるつもりだ」…ぐいつと腕を引っ張られて足が宙に浮くような感覚。ああ、なんて眩しいのでしょう。

無理矢理見上げるはめになってしまった真っ青な空。夏の光をきらきらと浴びてわたしを見下ろす都会育ちの男のひと。彼の、深い夜のような色をしている髪の毛がゆらりと揺れていて、気が付けばまた目が合っていました。逸らしたくても逸らせないのは、このお方から感じるオーラか何かが原因なのでしょう。

「分かったか？今日からしばらくは、お前は俺の女だ」

否定することも肯定することもできずにただただ固まるわたしの額にトンと指を突き立てて、宣言した“早乙女”さんは不敵な笑みだけを残して去って行っていきました。

頬をつねると確かな痛みが残ります。ああ、これは夏のマボロシではないのですね。

3・花の毒

込み合う食堂の中で、クリーム色のワンピースが戸惑い気味に揺れていた。

「何やってんだあいつ」

ひとの多さに怯える後ろ姿で、すぐにこの間のウジウジ女だと分かった。紅色のがま口財布を両手で握りしめて、食券を買う自販機の前で固まっている。眉を思いきり下げて泣きそうな顔で、何を食べるか決まらなくて迷っているらしかった。行動も思考も何もかもが、すげえトロくさい。

後ろに並ぶ列にやっと気付いたトロ女は、慌てて財布の中からお金を出そうとして小銭をぜんぶ地面にじゃらじゃらと落としていた。とうとう表情は曇りだして、泣き出す3秒前みたいな瞳の潤ませ具合に、見ていて腹がたってくる。座っていた席を立て、もたもたと小銭に広い集めている女の前まで歩いていき仁王立ちする。

目の前にできた影を不思議に思ったのか、女はゆっくりと顔を上げて、そして俺だと気付いた瞬間青白い顔をさらに青くさせて持っていた財布ごと地面に落とした。中身が全部飛び出して、俺の足元にもいくつか小銭が飛んできた。

「ほらよ」

仕方なく拾ってやったにも関わらず、女はぺたりと尻餅をついたま

ま顔を俯かせてしまう。すかさず、顎をもち上げて顔を固定させる。震える唇からは何も聞こえてこなかった。あー、面倒くせえ。

「さっさと金拾え。んで、さっさと食券買えよ」

「……」

「おい。聞いてんのか」

「……」

「ちっ」

微動だにしない女の腕をぐいっと引つ張って立たせてやる。肩を竦ませて泣きそうになっている女の代わりにせつせと金を広い集めて財布の中に突っ込む。並ぶのも面倒だったので、列に割り込んで適当なボタンを押す。出てきた食券をカウンターにポイツと置く。しばらくしてから出来上がった親子丼をお盆に乗せて、固まったままでいる女の腕を引いて歩き始める。くそ、なんで俺がこんな面倒くせえことしなくちゃいけないんだ。

「おら、早くここ座れ」

コクン、と小さく頷いてふらふらと椅子に腰掛けるトロ女。さっきから目も合わせようとしゃがらねえ。苛つく。隣に座って、じっと様子を観察すればさりげなく距離を置こうとする。苛つくので、細い足に自分の足をがっしりと絡ませて逃げられないようにしてやった。

「食え」

「……」

「俺が食えつつってんだから、さっさと食え。冷めちまうだろうが」

割り箸を不恰好にパキリと割ってから、一度だけ俺を見ようとして視線を泳がせる。結局視線は下を向いたまま、ちまちまと親子丼を食べていく。…食べるの遅えな、なんてどうでもいい情報を頭の中に入れつつ、そういえばこいつの名前さえ知らないことに今更気付いた。

「お前、名前は？」

ピタリと箸を持つ手が動きを止めた。それっきり、反応がない。俯いたままの女の頭をがしりと掴んで、ぐりんと自分の方に向かせる。やっとまともに合った両目は、困っているように見えた。口をはくはくさせて、何も話そうとしない女に苛立ってついつい口調が荒くなる。

「名前だ、名前。別に体重聞いてるわけじゃねーんだから、それぐらい答えられるだろうが」

「……」

「てめえ、いつまでそうやって黙ってるつもりだ」

「…っ。…っ。…」

パツと女の顔から手を離す。何か、おかしい。この間、はじめて話

し掛けたときも、今も、こいつの声を一回も聞いたことがない。薄くて血色の悪い唇をきゅっと閉じて、トロ女は相変わらず黙ったまま。ためしに「おい、アイウエオって言ってみる。ア・イ・ウ・エ・オ」と、促してみてもおどおどと口を開けたり閉じたりしてみせるだけ。

「お前、まさかマジで喋れねえの？」

長い前髪の間から覗くはちみつ色の瞳が、動揺を隠すことができずにゆらゆらとおおきく揺らいた。

「声、出せねえのか」

ゆっくりと頷いてから、怯えながらも俺を見上げた女の視線に、不覚にもほんの少しだけどきりとした。違和感の正体がやっと分かり、ふうんと頬杖をつきながら思うことはひとつしかなかった。

花のにおいなんかに惑わされるんじゃないかなかったぜ。

彼女にでっち上げる女、間違えちまった。こんな外見も中身も面倒くせえ女、御免だ。

あーあ、失敗した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1409y/>

スミレの花の砂糖づけ

2011年11月4日04時11分発行